

レゾナンスの意義

第三回

こころの領分

さて、住まいへの「思い」とは？

ひとは、投げやりにつくられたものを渡されたら、誰だって愛着がわかない。淡々と、決め事をこなすかのような仕事ぶりで渡されても、こちらの心は動かない。

それでもよければ、それはそれでいい。

しかし私たちは「思い」という重いものをしよいこんでしまふ。

「思い」がなければいいものはずくない。これは事実のようだ。が、これへの思い込みもまた強い。何でも「思

い」がこもったものはいい、と思う。

「思い」は「こだわり」と言い換えることもあれば「たましい」と言うひともいる。

かといって、他人様の「思い」がこもったものが、必ずしも、こちらにいいというわけでもない。

自分の住むところには、自分の「思い」をおしたい。

その「思い」は、あまたのものが混ざり合っているようで、なかなか伝えにくい。

ふつう、日光が欲しい、安全で広くて衛生的で便利にもなっていてほしい、などなど、と思う。

そういう「思い」の実現には、多くが、決まった水準（標準）のようなものができていき、緻密にもなってきた。それに従っていればそう間違いないもなさそう。

要するに、他人様と一緒に部分がたくさんある。それに右へならえしていれば済むのである。強いていえば、共有できる「思い」だとひとくくりにする、のかもしれない。

ところがどっこい、「私の」、「思い」が首をもたげることだってある。そういうものは、おおくの場合、微妙なものである。けれど気持ちを豊かにする牽引力になる。

四角いマンション、どこにでもある箱である。その箱に自分たちの巣をつむぐ。外見はそれほど特徴を持っていないわけではないが、わが住まいの巣に

けが聴ける声。

子どものころによく自転車で遊んだ川べりに住みたい、できたらあの川のどこでもいいから川べりのマンションに、と望むのだった。

つぎに、自分でつくることへの「思い」。たとえわずかでも自分が参加する、手を下す、自分の手を染める。自分がかかわっているという実感を、かすかでもいい感じ取れるようにしたい。

庭や、骨組を自分でつくるだけではない。カーテン一枚いや間取りだけは自分たちで考えたい、と思ったりする。

私的な「思い」は、このような二つのはっきりした「思い」をさしひいてもひろいこころの領分が残る。

私のいる空間の心地、気分、感情、情念、いろいろに表現される。なんでもいい、すべてのこころの領分が容れられる容器が必要だ。当時、それを「居心地」と呼ぶほかはない、と感じた。一九八五年ごろのことである。

日々変えていく。箱の中は自分（たち）だけでつむぎ、だんだんに巣らしくなっていく、そんな生活、暖かい自分の巣だと思ふ。

みんな持っていた子ども時代を想いおこそう。そのころは、どんなにわが家が高価につくられていようがいまいが、どうでもよかったはずだ。それでも懐かしさがよみがえる。

いかにもこれらの「私の」「思い」をことばにしているように見える文章がある。

平安のむかしから、おなじ光や音や匂いでも、微妙な色合いにつきまうかされ、わがものとして愛でてきた。

むかしでなくても家づくりにこだわる達人の文章はある。それを読んでみよう。なにか 特徴が浮かんでこないか。ひたすら集め、読み比べてみる。

立ち疲れ、コンクリート・タイルの床にへたりこんで、目の前の書架「文



え・安原喜秀

学」「日本近代」、次から次へと引っぱり出しては、どこかにそのような記述はないかと捜し求めたものだ。

だんだんにみえてきたのは、いくつかの強い「思い」。

まず、場所への「思い」がある。場所が奏でるあらゆるものへの愛着、場所への執着だ。そこにしたい。そこしかない。また、場所から立ちのぼる声にそっと耳を傾ける。その声に呼応して自らの場所を決めようとして。自分だ